芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 46　55. 4

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・挾　間　正　年　編集人・尾　登　一　信

80年代の県民文化育成に望む

大分県芸振会議副会長
大分県高文連会長　帆　足　敏　郎

昨年度は県芸振会議が結成されて15周年を迎えた記念の年であったが、同時にまた、将来の大分県民文化にとって、豊かな未来を期待させるいくつかの大事業が成功裡に遂行された年でもあった。

いま、過去1年の県民文化活動を回顧し、新年度の希望をのべたい。

54年度中の第1に重要な事業は、県芸術文化基金の設立であった。そもそも、財源の裏づけがない文化活動は、安定した展望をもつことができない。江藤教育長がいわれたように、この基金はまさに、「大分県芸術文化百年の大計」として県民に提案された。

「文化とは金のかかるもの」とはいえ、3億円もの莫大な資金調達計画が示されたときには、正直のところどうなることか、と心配だったが、7月県議会で条例化されたころから民間寄付金も意外に順調な伸びを示し、年度末を待たずして今年度分の目標額を達成した。ご理解を賜った諸賢にあつくお礼を申し述べたい。

由布岳

大分県立芸術短大教授
小　野　一　郎

第2は滝廉太郎生誕百年記念行事と第15回県芸術祭が盛大にもたれたことである。

「地方文化の時代」にふさわしく、開幕行事の県民演劇「ふるさとが燃える」は大分公演だけでなく佐伯公演も行われたが、これを含めて主催・共催行事14件、参加行事68件という多彩さであった。

第3には全国高校総合文化祭が大分県で開催されたことである。これは参加人員2万人という県民文化活動史上空前の、あるいは絶後の大事業であった。全国47都道府県全てが、いずれかの部門に参加するという、文字どおり全国規模の大文化祭であった。総合開会式では、大分県下に残る優れた文化遺産が高校生の手により全国の皆さんに披露され、また、各県高校生文化交流の「るつぼ」となった。部門的にみると、県下ではじめてマーチングバンドが作られ、「青春の爆発」を思わせる好演技は県民の目をみはらせた。高校邦楽もこの大会でやっと発展の軌道にのった。合唱、演劇、吹奏楽、美術などの部門で他県高校生の技術水準の高さをまのあたりに見たことは「黒船の来航」にも似た文化刺戟をもたらした。この大会を実質的に主催した大分県高文連は、まさに「大分県民文化の苗どこ」という使命をになえることを示した。

さて、これらの諸行事を実施しつつ痛感した2、3の点を申し述べて、新年度のための問題提起としたい。

その一つは、演劇や吹奏楽の練習場がないことである。県芸術会館はまことに立派な「文化のお座敷」なのだが、まだ「文化の台所」がないのである。大分工業高校跡などを改造して、定通教育・社会教育等の施設とまとめてその中に、練習舞台や音響公害を苦にしなくてもすむ吹奏楽練習などができないものであろうか。

第2に、文化活動指導者の育成である。「草地おどり」が高校生の後継者づくりに成功しつつある反面、「北原人形芝居」はこの点でまだ極めて心配な状態にあるのは、高校教師のなかに指導者がいるかいないかの違いからきているのである。

県民文化は県民自らで育成するのだ、という観点からみると、例えば、美術、書道の教師の人数比が教諭3に対し非常勤11という状態は緊急に改善されねばならない。

先取りした「地方の時代」を充実させよ

大分合同新聞文化部長　宮　崎　寛一郎

1年たつのは早い。

昨年の今ごろは、8月の初めに大分・別府で開かれる第3回全国高校総合文化祭と8月24日の滝廉太郎生誕100年記念演奏会の2大行事に向けて、関係団体はひたむきな情熱を傾けていた。

これが大成功のうちに終わると、次は秋の県芸術祭だ。開幕行事の県民演劇、閉幕行事の県児童文化研究会を中心に、その年の文化活動の総決算の場にふさわしい行事がかなりの数、催された。

そして、県民オペラの第1回サントリー地域文化賞・最優秀賞の受賞（11月末）だ。

県芸術祭が15回の歴史を持ち、参加団体の日常の活動が血となり肉となって〝地力〟がついてきていることは、年年証明ずみのこと。こうした、これまでの活動が実って、全国的な視野で評価された〝代表選手〟が県民オペラであって、これはひとり県民オペラにとどまらず、文化関係者全体の努力の結晶だといえないこともない。

よく「地方の時代」「文化の時代」といわれるが、大分の文化活動は、その意味では、ずっと以前から「地方の時代」を先取りして活動してきたといえるだろう。

だが、活動が活発になればなったで、悩みや課題も多くなる。本舞台で、より内容の濃いものをつくり出すべき〝日常の場〟練習場すら満足にない状態だし、会場使用料を安くしてほしい、ジャンルの交流の場をつくってほしい、芸術文化をもっと地方へ…等々の声はよく聞く。

県芸術祭一つとっても、参加行事ゼロの町村や大分・別府中心の行事に不満をもらす市町村もある。昨年からメイン行事は1カ所地方巡回するようになり、今年度は早々と中津市で開く巡回予算100万円がついた。喜ばしいことではあるが、県が「地方の時代」をうたい、文化行政に力を入れ始めた予算にしては、1カ所というのは、どう考えても少なすぎる。せめて2、3カ所は巡回してほしいところだ。県民はそれを待ち望んでいる。

[redacted]

80年代を迎え、今年の県芸術文化界に望む

文化的土壌の再認識

NHK大分放送局放送部副部長　歌　田　雅　哉

私は昨年夏大分に着任しました。勿論大分は私にとって初めての地。それ丈に新鮮な印象を受けると同時に、文化的な土壌を持つ大分の地に目を瞠る思いがしました。宇佐八幡信仰、六郷満山神仏混淆文化、宗麟に代表されるキリシタン文化は、日本の歴史上に画期的な足跡を残していますし、三浦梅園をはじめとして、前野良沢、田能村竹田、福沢諭吉、朝倉文夫という誇るべき先輩を輩出しています。しかし、人間は自分の郷土を知り過ぎているために、自明の理としてその本質、特色を見逃す事が多いのではないでしょうか。現在、新産都建設に伴って県内では「村おこし運動」が盛んですが、文化面でも「郷土の見直し・再発見」が必要なのではないでしょうか。つまり、文化的な土壌を再認識する事が、一九八〇年代に生きる私達の責務だと思います。

NHK大分放送局でも、この四月から国東半島の民俗行事を中心に文化遺産を紹介する〝くにさきノート〟を年間シリーズとして放送する事にしました。この〝ノート〟が文化的資料として、大分県の芸術文化振興の一助ともなればと、私達も意欲を燃やしています。

ところで、大分県は〝小藩分立〟の歴史的背景を担っているが故に、一つの県としてのまとまりの意識に欠けると言われます。しかしここで発想の転換を図るべきではないでしょうか。各地域はそれぞれの文化的風土と特色を持っています。その〝小藩〟を再評価し、更に一つの文化の輪として結合する事。もしそうした大分の文化の輪が出来るとするならば、〝小藩分立〟のマイナス意識は前向きに動き始め、新しい一九八〇年代の大分を作り出す礎が築かれるのではないでしょうか。

一九八〇年代に期待したいもの――それは文化的な土壌の再認識と、文化の輪作りによる大分県の発展、の二点です。

[redacted]

吉四六さんを育てる行政を

朝日新聞大分支局長　桐　明　桂一郎

とんちと奇行で知られる吉四六さんの祭りが、ゆかりの地、野津町であるというので出かけてみた。四月六日、風の強い日だった。菩提寺の普現寺の境内にある吉四六さんの墓の前には、線香と花束が供えてあった。苔むした、小ぶりな墓石がなんとも奥床しい。人の姿はない。

墓地にほど近い町立社会福祉センターが祭りのメーン会場だった。茶屋やみやげ品店が並び、センター内の舞台では町民のカラオケ大会。町民たちは春の一日お祭りムードを満喫しているようにみえた。

そんな町民の楽しみにケチをつけるつもりは毛頭ないが、率直にいって期待はずれ、の気持ちが強かった。余所者の身勝手を承知でいわせてもらえば、郷土が生んだ偉大な民話の創造者にふさわしい、もっと遊った祭りにできなかったろうか。県民はもちろん、民話の愛好者たちが全国から集まってくるような民話の祭典を志向してほしかった。吉四六さんと並び称せられる肥後の彦一さんとの交流でもいい。そもそも民話とはなにか、いまのわれわれの暮らしや文化とどうかかわっているのか。そんな討論会を開くのもいい。全国各地に伝わる、すばらしい民話を披露し合う場があっていい。こんな祭りがほしい。

毎年八月下旬になると、湯布院町に全国から映画好きが集まって三日三晩にわたって映画祭が開かれる。いまや、日本の映画界にとって、見逃せない主要行事のひとつとして定着した。この町に、そういうことを考え出した人がいたから初めて実現した企画だろうが、このことは、たとえ「地方」でも内容次第では「中央」も無視できない、ユニークな催しができる可能性を教えてくれる。

民話祭だって、やろうと思えばできるはずだ。特に、野津町には、土にしっかと根をおろして吉四六話一筋に演劇活動を続けておられる野呂祐吉さんという、吉四六さんの、最もよき理解者がいるではないか。こういう面にこそ、自治体は物心両面の援助を惜しんではなるまい。それこそが、真の文化行政であり、心の時代といわれる八〇年代の行政の指針となるべきだ、と思う。

80年代を迎え、今年の県芸術文化界に望む

リーダーの出現と次代の育成

テレビ大分報道制作部長　井　口　恒　勇

大分県の芸術文化活動は近年、ますます活発になってきた。県民オペラ、県民バレー、県民演劇等、年を追うごとに高揚した姿が見られ、県民にとって大変うれしいことだ。

ひとつの芸術文化が開花し、実を結ぶ過程にはそのリーダーの火のような情熱によってドライブされていることが想像される。県民オペラにおける小長先生をはじめとする各リーダーがその適例であろう。

反面、本県の芸術文化界にひとつの不毛地帯がある。それは文芸界だ。ここはリーダー不在といってよい。文芸界にリーダーが必要かどうかは議論のあるところだが、まあ、代表世話人といった方がよいかも知れない。とにかく、文芸サークル等を作って積極的に活動する人が少ないのだ。いずれにしても県文芸の不毛を緑化するには炎のようなリーダーの出現を待つほかはない。

さて、これからの本県の芸術文化に望むことは、そのローカルティを忘れてはならないということである。中央を意識し、対抗するための地方を云々するのではない。地方に密着した素材にこそ、地方芸術文化の芽が内包されているのである。80年代は地方の時代といわれている。わが大分県の芸術文化界にあっても大分県に根ざしたものにとり組むべきであろう。

次に県芸術文化界の活動家諸氏にお願いしたいことは次代の育成・指導に努力して頂きたいということである。県芸術文化界の息の長い振興は松明をうまく次代に引継ぐかどうかにかかっている。

歴史民俗資料館の建設にあたって

歴史民俗資料館準備室主幹　後　藤　昭　六

県教育委員会の今年の懸案であった「宇佐風土記の丘」歴史民俗資料館の建設を促進し、開館のための諸準備を進めるため、本年4月1日に大分県教育庁歴史民俗資料館設立準備室が設置された。準備室は県教育庁の5階の第53会議室を専用し、室長以下7名のスタッフが配置され、建築、展示、研究、環境整備等の計画推進にあたっている。

◎　建設のねらいと現況

「宇佐風土記の丘」の中心施設となる県立歴史民俗資料館は、来年秋の開館を目指して、宇佐市駅館川下流地域の川部・高森地区に建設が進められている。

「宇佐風土記の丘」の全体構想は、川部・高森古墳群を含む17.6*ha*を古墳公園として整備し、これに宇佐神宮、御許山など宇佐市周辺の史跡を結び史跡公園のネット・ワークを形成しようとするものである。

古墳公園の整備計画は、九州最古の前方後円墳として知られる赤塚古墳など7基の古墳を、綿密な学術調査を加え公開することにしている。環境整備では、緑豊かな自然林をはじめ、駅館川・大池・湿地など変化に富んだ立地を生かして修景が施され、憩いながら学習できるユニークな大型史跡公園が完成するのも間近い。

この公園予定地の東北隅に歴史民俗資料館が、その骨格を現わしている。鉄筋平屋建て(一部地階) 延べ3,300平方*m*の規模を誇る資料館は、切妻屋根・高床の古代建築のイメージを基調としている。この建物には、調査研究、整理保管、展示、研修などに必要な施設・設備が計画されており、完成後は、宇佐一国東にまたがる広域史跡公園圏のセンター的役割を果たすことになる。

◎　「文化財の宝庫」に開発の波

宇佐地方は、全国八幡宮の総本社・宇佐神宮を中心に独自な文化の栄えたところであり、今なお数多くの文化財が集中している。

この宇佐地方に隣接して、六郷満山文化の名で知られる国東半島がある。ここも又、無数の史跡、石造美術や民俗文化財が、特異な自然的風土の中に埋もれている。

宇佐・国東の地方の歴史と文化については、その真価が正当に評価され、あるいはその全体像が十分に明らかにされないうちに急速なブームを迎えようとしている。

すでに、俗化現象が現われ始め、地域開発と過疎化の進行する中で、美しい自然と貴重な文化財は、破壊、散逸、消滅の危機にさらされている。国道10号線バイパスの貫通、大分空港の拡張に開発のテンポはさらに早まるものと思われる。ここには地域住民の要請と期待がこめられているが、半面、文化財の現状に対する正しい認識と保存への積極的な対応も望まれている。

◎　文化財保護の課題

地域振興を目指す諸開発の進行という現実をふまえ、確固とした展望をもってこの地域の文化財を保護していかねばならないが、現実にはたやすいことではない。まして文化的風土に培われた地域の特質や歴史的環境の保存にいたっては、まさに国家的事業として強力な取り組みが求められているのである。

全国有数の文化財の宝庫である宇佐・国東の自然と地域の人々の営みとの深いかかわりあいの中で息づいており、その結びつきを壊してしまっては、もともこもない。それだけではない。たとえば宇佐八幡の歴史と文化、六郷満山の仏教文化などは、いまだ学問的にも多くの謎に包まれている。文化財保護法で『史跡』として保護していこうとしても、かつての盛期の寺院の姿は、まだ解明されていない。

これからは、地域と融合した文化財の保存のための方策を模索するため、諸学を動員した調査と研究の結果にもとづいて保護対策を講じていかねばならない。

◎　資料館の施設機能とその意義

このような状況をふまえ、歴史民俗資料館は、宇佐・国

東をはじめ県内外の文化財の調査研究と保存公開のセンターとして、活動を始めることになる。

資料館は、歴史、民俗、考古、美術の各分野に優秀な専門職員を確保し、調査研究の体制を整えるほか、石造美術や考古・民俗資料の保存処理と修理を行う施設機能も備えられる。特に石造物の保存科学部門は、全国一の石仏の宝庫である大分県にふさわしい内容の充実をはからねばならない。

展示部門では、宇佐・国東の歴史と文化を体系的に展示した常設展のほか、資料館の研究テーマに沿った企画展も計画される。収蔵部門は、国宝級の文化財の保管に耐え得る本格的な収蔵庫が設けられ、離散している郷土の文化財の里帰りを待つことになる。

「風土記の丘」の設置目的は、当初、急激な地域開発から文化財の広域保存をはかることにあったが、教養や趣味など生きがいを充足するための学習の場としても大きな期待が寄せられている。

昭和55年度前期大分県立芸術会館ご案内

美術館　開館時間　9：00～17：00（入場は16：30分まで）　月曜休館

◦第11回日展大分展
巡回基本作品に大分県出身作家の作品を加えて
4／20～5／11

◦春季県美展
アンデパンダン展
日本画・洋画・彫刻・工芸
5／20～5／25

◦シャガール展
近作を中心に油彩素描等約80点
6／7～6／29

◦所蔵品展
所蔵品の代表作に新収蔵作品を加えて
7／5～8／24

◦大分県在住作家個展シリーズ
日・洋・彫・工・書・写・デザインの各ジャンルから
前期7／22～8／3　後期8／5～8／17

◦高山辰雄展
大分市出身の日本画家　昭和54年度文化功労者
8／30～9／23

文化ホール　開館時間　9：00～22：00　月曜休館
（下記の開演時間は、多少変更する事があります）

◦古典落語「三遊亭円楽独演会」
「開口一番」　三遊亭賀楽太
「町の若い衆」　三遊亭円楽
「浜野短随」　〃
4／25(金)　18：30

◦ウイーン・アカデミー合奏団
指揮　エドワルド・メルクス
管弦　10人編成
6／28(土)　18：30

◦チェコ少年少女合唱団
世界の民謡、民俗衣裳による歌と踊り、地元合唱団との交歓
7／20(日)　14：00

◦青少年のための音楽シリーズ
第3回芸館サマーコンサート
出演　大分交響楽団外
8／10(日)　14：00

◦第3回芸館創作実験劇場
劇団K・Y　ラシーヌ作「メトリダート」
8／29(金)　18：30

◦文化庁移動芸術祭日舞
出演　花柳流・藤間流外
9／8(月)

波紋

人材ショック

西日本新聞大分総局長
花田　衛

東京で純文学の出版社を経営している友人のTが3月に来分した。有力作家と顔をつなぎ、同時に有望な新人を発掘するのが目的で全国を歩いている。今回は熊本、宮崎を回って大分に来たのだが「大分はいないねえ」というのがTの第一声だった。

私自身、2月末の異動で大分へ来たばかりだから大きなことは言えないが、長年、文化部記者をしてきた感じでも、作家といえば松下竜一さん、小郷穆子さんくらいの名しか浮かばない。さびしいのは事実である。そしてそれは純文学にかぎらず、芸術の分野全体にもいえそうである。

だが私は、おりから県立芸術会館で開かれていた「大分の南画展」を見に行ったのを思い出す。田能村竹田の本物を見たのはこのときが初めてで、大屏風の「月下群雁図」や重文の「暗香疏形図」などに目を洗われた。同時に竹田門下の裾野の広さをも知らされた。高橋草坪、帆足杏雨、田能村直入らの高弟はじめ森秋艇、平野五岳、長三洲、後藤碩田……。いわゆる大分の南画が花開いている。

つまり、一人のすぐれた人材がおれば、その周辺、門人から文化の波が彭湃として起こるのではないか、というのが私の考えである。旧制大分中学（上野丘高）で大正時代、美術を教えた山下鉄之輔の生徒の中から林房雄、佐藤敬、高山辰雄、園田清秀（高弘の父）らの芸術家が群出したのもその一例といえよう。

芸術会館は他県のものにヒケをとらぬ偉容を誇っている。建物は金があればできるが、人材はそうはいかない。建物におとらぬ人間を育てるか、急ぐなら移入する手もあるだろう。大分大学、別府大学あたりで考えるのも一案ではなかろうか。

カルチュア・ショック、文化的衝撃を人材の面から与えるのはいかがなものか、というのが大分に日の浅い私の管見である。

かくて別府文学学校誕生

別府文学学校主宰
志村泰治

昨秋。編集長が多額の印刷費同人費持ち逃げのいわゆる「文芸大分事件」がおこった。

その対策会議を当時編集にたずさわっていた人々のご好意で傍聴させて貰った。多額の借財をどうするか。地に墜（お）ちた信用をどうするか等、熱心な討論の挙句「文芸大分」続刊をきめた若い文学愛好家たちの熱意に胸を打たれるものがあった。創作の苦しみ以前にこの青年らは人間くさい世俗的なあとしまつの苦労をしなければならないのか。

そう思う反面、彼らが大変、幸わせに見えて来るのであった。すでに彼らは小説でも何でもバリバリ書けるし、誰の力ぞえも借りず堂々と今後も文学活動に邁進するであろう。

そうだ私は別府へ戻ろう。そして無償の文学塾を開こう。同人誌以前の文学入口に対するアドバイスをしよう。小説を書いて見たい人は多いと思う。心の中に燃えるものを持っている人は、何も特定の文学同人誌らの特典でも権利でもなく誰でもが持っている筈だ。ただどうやって書けばよいのか方法がわからないという単純な壁を誰もが持っている。ちょっとしたアドバイスで誰でも書けるのだ。多少の情熱があればである。そう思った。

未熟な私一人だけで出来る仕事ではない。幸わい小郷穆子、玉田南子、佐賀忠男、衛藤賢史、仙川竹生の諸氏にアドバイザーとしての賛同を得た。いずれも別府・杵築両市で詩、小説、シナリオを書いている人々である。教えると言ったものではない。我々も一緒に大衆と共に学んで行こうというのである。

結果は意外な反響を呼び、第一回の会合に45名が集り、現在毎回30人を越す人々が集って来る。別府市の温泉課の協力で、市営不老泉の2階で毎月第3日曜1時からゼミ、パネルディスカッション、習作をやっている。主婦が多い。佐伯市・宇佐市から通う人もいる。「生活に張りが出た」と口々に言う。

「地方文学の旗手たらん」「作家はハングリーだ」等、色あせたかけ声などまったくない、本当の生活の中から静かに文学を産み出そうとする人々ばかりである。

＜れんさい＞

豊後水道の文芸 その6

大分大学教授　佐々木　均太郎

徳富蘆花「死の蔭に」と豊後水道

「不如帰」「自然と人生」などで有名な明治の文豪徳富蘆花と大分県の関係は、明治三十三年に発表された「灰燼」が中津を舞台にしている。

しかし、蘆花がはじめて大分県に来たのは、大正二年の九月、夫人と娘を同伴東京を立って、名古屋、大阪、神戸、明石などをめぐり、大阪から木浦丸という船に乗って別府を訪れる。その時の旅行記が大正六年三月に刊行された「死の蔭に」である。

「最後の逃げ場所の死に次いでは、眼に見ゆる現在から暫時でも移し去ってくれる旅は手頃の逃路である。而して其旅路が死への近道ではないとは誰が保証し得やう?」と書いているように蘆花は死の蔭を感じながら、その活路をこの長途の旅に求めたのではないかと思われる。

蘆花の一行が、大阪から木浦丸に乗って別府に入った日は篠つくような秋雨が降りしきっていた。「死の蔭に」の上巻中「豊後路」の章に彼は次のように書いている。

「豊後水道にかかってからは、船の揺れ方も、一きは烈しく、舷窓から覗く空はますますうちかぶって、もう繊(ほそ)い雨の一筋が二筋厚い硝子に音づれてきた。(略)解(はしけ)が来た知らせに、蒼い顔した女子供を励まし、雨支度で甲板に出る。可なり雨が降って居る。雨を持上げる波のうねうねを隔てて、雨にぼかされた別府の陸が渋々顔を見せて居る。解に移る頃はざあざあ降りになった。傘と雫と打ち上ぐる波のしぶきで、(略)」と豪雨の豊後水道を描写している。

「一驟のざあっと過ぎた夕方、ホテルのベランダに出て見る。(略)南に偃(えん)月形に縁どって、火光の瓔珞がきらきら光って居る。近く疎らなのは浜脇、神崎あたりか。雨に遠く湾を隔てて彩しい光の集団は、大分でなくてはならぬ。涼しさ過ぎて黒曜石のごと黒く冷たい初夜の空気に、きらきらちらちらと顫へる紅宝石(ルビー)の閃き黄玉(トパズ)の瞬き涼しい寂しい美しい生きた然し夢の様な光の見めきを見つめて居ると、魂も消ぬべく覚えるのである。」

豊後水道の夜景を美しく描いて、同月十五日一行は佐伯へと向かう。

[redacted]

三重町芸術文化発表会について

三重町中央公民館長　伏野　宗孝

昭和五四年度の三重町芸術文化発表会は一一月二五日の日曜日一〇時から、三重町中央公民館で開催されました。

合同発表会も回を重ねて第八回を迎えましたが、年々盛大になることは、関係者として真によろこばしいことであります。

町内の芸術文化団体連絡会の参加団体は、現在約二〇団体ありますが、その組織も大小さまざまで、また内容も多岐にわたっていますので、それらの団体が合同で発表会を行なうのは、きわめて困難でありました。

約一〇年程前、合同発表会の計画をしたときは、賛否さまざまで、「自分のところは、年々発表会をしているから、合同発表会など必要ない」とか、「そんな短時間では発表できない」とか、「自分のところはまだ発表できる段階ではない」とかいろいろの意見がありました。それでもとにかく出発はしましたが、観客も少なく、一、二年休んだこともありました。

その後、各団体と話し合って、係の責任を持ってもらうことにし、入場券（当時は無料）を配るようにしたところ、だんだん盛りあがって来たようです。

五年前新しく公民館ができてから観客も多くなり、三年前から入場料も取ることにして半額を所属団体に払いもどしをすることにしたところ、入場者が増加したのは面白いことだと思いました。

本年は県協会長も来賓として来られ、大会に花をそえていただき盛大な発表会ができました。

参加した団体は、謡曲、詩吟、民謡、合唱、洋舞、日舞等一三団体の発表と、絵画・生花・書等の展示、それにお茶のグルーも茶会を開いていました。それぞれ立派な出来ばえで、観客のマナーも良くなり、約八百人を越える人たちが観賞したようです。

一二月には県知事の表彰もいただいて、関係者一同大変よろこんでおります。

今後の努力を期して感謝の意を表したいと思います。

[redacted]

第１年次目標額を達成

―大分県芸術文化基金の募金状況について―

昭和54年３月の芸振臨時総会で、具体的な運動の取り組みが決まって以来、前半は芸振加盟の個人・団体会員を対象に積立金の拠出が進み、８月１日の大分県芸術文化基金条例の施行や11月27日付の寄付金に対する免税措置が認められた後半は、主として企業関係の寄付申し出が続き、募金運動は順調に進展している。

＜活発な募金組織の動き＞ 募金運動の提唱者であり、かつ募金事業の受益団体である芸振会議は、８月の臨時総会で募金対策理事会を設置し、副会長・理事全員が加盟団体・法人・一般の３つの対策理事会の任務を分担して募金活動にあたっている。

いっぽう、昨年10月31日には、大分県芸術文化基金促進協力会（会長挾間正年）が発足し、全県的な取り組みを進めており、着々と募金実績をあげている。

＜募金活動の現況＞ 基金積立目標額３億円、このうち募金目標額は１億5,000万円。これを６カ年計画で集めることとし、第１年次は、２,000万円の寄付金を各方面に呼びかけてきた。

芸振加盟の個人・団体会員には毎年、１人１口1,000円以上を目標に拠出を要請し、文化団体の公演収益の一部寄付もお願いするとともに、未納団体の解消を急いでいる。

法人（企業）関係では、県内大手の会社、金融機関に働きかけ、６カ年の年次計画を見通した寄付全体額を明示してもらい、納入方法については一括または分割方式を採っている。

一般（個人を含む）に対しては、昨年11月の文化の日の街頭募金を皮切りに、県庁・県立学校・県教育庁・教育機関などにも募金を依頼した。

＜募金状況＞ 昭和54年度は4,000万円の積立金を予算計上していたが、４月16日現在で、2,422万7,478円の寄付金が集まり、県費2,000万円と合わせると目標額を422万強オーバーし、第２年次分の実績分として確保している。

受納済の寄付金2,422万7,478円の内訳は、芸振加盟の個人・団体会員600万円（目標額600万円）、企業関係1,260万円（同1,200万円）、一般562万7,478円（同200万円）となっており、予約を含めると3,650万円に達している。

矢田歯科医院

別府国際観光会館２Ｆ

ＴＥＬ24－１８７６

＜寄付金内訳＞ （55.４.16現在）

区分		54年度寄付目標額	寄付金額	左の主なる内訳
芸振加盟	個人会員	6,000,000円	1,513,000円	挾間　正年　100万円 辛島　武雄　10万円
	団体		4,587,000	
企業体（法人）		12,000,000	12,600,000	大分銀行　200万円(1,000万円)　マリンパレス　300万円(300万円) トキハ　600万円(600万円)　後藤組　60万円(300万円) 梅林建設　―(450万円)　佐伯建設　―(300万円) 佐藤組　―(400万円) 吉村薬品　100万円(300万円)　※(　)は寄付申込額
個人・一般		2,000,000	5,627,478	県庁　1,723,339円　工藤起左子　1,000,000円 県立学校　1,041,646円(34校)　日展実行委員会　550,000円 県教委・機関　913,000円
合計		20,000,000	24,227,478	